

wanakio 2002

痕跡プロジェクト

那覇市農連市場痕跡プロジェクト

参加者 高木正樹（東京在住五十一歳）レポーター1

今回のワナキオ2002で、片野坂達也氏の発案による、農連市場内の地面や、床、壁、柱などの傷跡、痕跡を収集するプロジェクトが行われるのを聞き、思うところがあって参加させていただくことにしました。私の収集した痕跡はガープ川の橋の袂、当銘茶舗店の角に近い車止め付近の削（はつ）り跡です。

この痕跡をなぜ収集したのかについては、少々話が冗長になってしまいましたが、私自身のお話からさせていただかなければ理解していただけないと思います。ちょっと辛抱してつきあってください。

私の高校時代からの友人が沖繩に仕事を見つけ、こちらに住み着いたのが二十数年前になります。それをきっかけに、私も年に数回は沖繩を訪れるようになりました。私は東京で住宅情報誌のライターをしていますので、割合勝手に休みが取れるのです。それで、初めのうちは戦跡や、普通の観光地を回っていました。ダイビングの面白さにのめり込み、一時は年に十回以上も沖繩に通ったことさえあります。当時は阿嘉島が中心

で、那覇は飛行機の中継点でしかありませんでした。

それでもここ五、六年ほどは、体力的にも問題が出始めたこともありましたが、本島内をゆっくり歩き回る方が面白くなってきました。那覇の公設市場あたりから始まり、少しずつ町歩きの範囲が広がっていったとき、この農連市場に出会ったのです。

ここで、野菜を売るおばちゃんたちの表情に見とれ、やりとりを楽しんでいましたが、ふとなにげなく足下を見ると、地面に不思議な削(はつ)り跡があります。気がつくとき、この削り跡は市場のあらゆる所にあり、最初は、ただの滑り止めかと思っていたのですが、何かそれだけでは済まないような、妙な存在感のようなものを感じました。何と言ったらよいのかうまく言えないのですが、用途を超えた何かの強い意志のようなもの、そういった美しさのようなものを感じたのだと思います。

その時は、そんな漠然とした感情を抱いただけですぐに忘れていたのですが、二年半前に偶然ある人物に出会い、その感情が呼び起こされたのです。

私は、前にも申しましたが、住宅情報誌のライターをしています。この職種としては、自分で言うのも妙ですが、草分け的な存在といえますか、ですから私のような文才の無い者でも、どうにか今までやってこられました。

この仕事を始めた時は、まだ日本はバブル経済の真っ只中でしたから、仕事はどんど

んありましたし、不況になってからもそれなりに仕事が出来てきます。人の不幸で商売をしているみたいで、ちょっと気が重いときもあるのですが、住宅のローンが払いきれなくなり競売にかけられたような物件を探し出して紹介記事にしたりもします。こういう事は、私のようなキャリアのある者の方が動きやすいのです。

随分、余分なことを話していますが、そういうこともあって、私は結構、簡易裁判所によく出入りしています。そこで、K氏という人物に出会ったのです。彼とは、何気なく世間話をしている内に、以前沖繩に住んだことがあるというので、会話が弾み親しくなりました。そうする内に思いがけない話を聞いたのです。

彼の名前を私はもちろん知っていますが、彼自身名前が出ることを望んでいませんので、ここではKということにしておきます。彼は現在六十代の前半位ですが、亡くなった父親の財産相続のために簡易裁判所に来ていたようです。

彼は一九七〇年代には、将来を嘱望される気鋭の彫刻家として活躍していたようです。その頃のことについてはあまり多くを語ろうとしないのですが、断片的な話からでも、そのことはよく分かりました。

ところが、七〇年代中頃からの美術界の状況、特に彼のような注目される若手彫刻家は、都市に設置される、所謂、公共彫刻の要請がかなり頻繁にあり、彼の周囲の作家達

が安易にそのような事業に参加しているのを目にするにつけ、美術そのものにだんだん嫌悪感を持つようになりました。行政の陳腐で月並みな文化活動を小馬鹿にしながら、そのおこぼれを狙う彫刻家たちの浅ましさに嫌気がさし、自分自身も同様の人種に思えてきたようなのです。彼は突然制作活動を止めて、放浪生活のようなことを始めました。千葉で農家の手伝いをしているとき有機農法に出会い、八〇年頃数名の仲間と沖繩に渡って、本格的な有機農法によるコミュニティを作ろうと糸満に土地を借り受けて、共同生活を始めたようです。

彼らの作物は慣れない土地と技術のせいで、あまり立派なものとは言えず、通常の販路に乗ることが出来ません。コミュニティの賛同者に個別のルートで販売もしていたらしいのですが、この農連市場にも作物を持ち込み相対売りを始めました。

当時農連市場は拡張工事をして、川の向こう側、つまり壺屋側に新しく、農家が直接相対売りをするようなスペースが増えたところでした。ガーブ川には橋が数本架かりその連絡も便利になりました。

ところが、こういった市場は、どこでもそうなのですが、継ぎ足しては継ぎ足し広がって行くために道は迷路状になり、通路には段差が出来たりします。ガーブ川に新しく出来た橋も袂にかなりの段差が出来てしまい、コンクリートでその段差が埋められまし

たが、かまぼこ状のかなり滑りやすい状態になってしまいました。コンクリートを打つときに横筋が何本も刻まれたのですが、あまり効果はなく、何人かの人が滑って怪我をする事故が続きました。

特に酷かったのは、夕方、自分の畑で採れたさやいんげんを売りに来た七十八歳のおばあさんが、帰り道ここを通るとき転んで後頭部を強打し、十日以上意識が戻らなかったことです。

足下が暗いのが事故の原因でもあるからと、蛍光灯が付けられましたが、さほどの効果はありません。やはり事故が続きます。

滑り止めに、上から砂利の入ったコンクリートが塗られましたが、一月もしない内にひび割れ、剥がれてしまいます。

それならば、と、K氏は石彫の要領で、このかまぼこ状のコンクリートに削(はつ)りをいれることを提案しました。とはいっても、十年近く美術とは無縁の生活をしていましたし、ちゃんとした道具を持っている筈ありません。適当にそれらしきものを近くで見繕って、とにかくやってみることにしました。

最初の一撃を加えたとき、K氏は何か妙な感覚を覚えたと言います。これまで、感じたことのない、何かの啓示のような感覚だったそうです。とにかく無心に、扱にくい

鑿で全面に削りをいれ、一息いれて、自分の仕事を見たとき、彼は妙な感動を覚え
た。

全く無心に、人が滑らないようにと削った、かまぼこ状のコンクリートの塊が、かれ
の鑿の跡によって、実に充実した輝きを放っているのです。もちろん、彼以外の周りの
人はそんなことは気にもせず、足下がしつかりして滑らなくなったことを喜んでい
るだけだ。

彼はこの後、請われらままに一年間で、市場内に六箇所仕事をしました。もう一つ
の橋の袂や主に軒の切れ目、それらは雨が降ったときに滑りやすい箇所です。勿論、
自分が昔彫刻家だったことは一度も口に出しませんし、名前も言いませんから、糸満
から野菜を売りに来る手先の器用な人としか思われていません。彼自身も過去の自分
の仕事とは全く無関係と思っていました。

市場で働く人々は、はじめは足下が滑らなくなったことで喜んでいたので、徐々
に彼の残した鑿跡の存在自体が心地良いということに気が付き始めました。誰からも
なく、滑り止めの用目的を考えずに、彼に心ゆくまで鑿跡を付けて貰ったらどうだろ
うか、という話になりました。

そう言われても、彼は却って気乗りしません。それでは、ということ、開南側の開

口部の大きなスペースに削りを入れることにしました。ここも雨が降ると滑りやすい場
所だったので、広い開口部のため自動車の乗り入れが多く、さほどは転倒事故が起
きない場所だったため手を付けていなかったのです。はじめは気乗りしなかったのです
が、この広いスペースにいざ鑿を入れ始めると、すぐに彼は没頭し始め、一週間ほど寝
食を忘れて殆どぶっ通しで仕事をしました。この場所こそ、私が五年前に感動した削り
の跡だったので。偶然にも、私はその作者と出会ってしまったのです。

糸満の共同生活は、メンバー間の女性問題が起き、関係がぎくしゃくし始め、結局二
年ほどでコミュニティは崩壊し、彼は沖繩を離れたそうです。

彼とは裁判所で何度か会い、その度に結構長い時間話し込みました。私自身とても
彼に興味がありましたし、彼も私のことを気に入ってくれていたようで話は弾みました。
しかし、なかなか連絡先は教えてくれませんでした。遺産の整理が済んだら、すぐに東
京を離れるからと彼は言っていました。無理矢理電話番号を聞き出しておきました。

三カ月ほど経って、彼はもう裁判所の用事は無くなった、と私に言いました。もう少
ししたらまたどこかに行くことになるだろうと。

私は、立て込んでいた仕事を少々無理してこなし、1週間ほど休みをとって沖繩に行
くことにしました。彼の鑿跡をもう一度目にしたくてたまらなくなったのです。そして、

彼が初めての一撃を加えた橋の袂のその場所を確認したくなかったです。

彼はその最初の一撃の鑿跡の位置を驚くほど正確に覚えていました。私に図で示して、このこんな鑿跡が集まったところのこれだと明確に教えてくれました。別れ際に、彼は、実はその後沖繩以外にもいろんな土地に行き、その土地土地の市場などに、勿論、名を告げず、削りを入れ続けていることを、ちょっと、恥ずかしそうに告げました。その時の彼の目は少年の様でした。

沖繩に着くと、ちょうどその日が那覇祭りの日だったことに気がつきました。車もそのすぐく渋滞し、空港から農連市場まで随分時間が掛かり、早くあの鑿跡が見たいと焦っていた私は少々苛立っていました。

やっこのことでタクシーを降り、私は急いでガーブ川の袂に向かいました。彼が書いてくれた図を片手にしてまさにその場所に立ちました。彼の記憶は完全で、すぐにその最初の一撃の鑿跡は見つけられました。しかし、その橋の袂には、車止めのポールが二本、後から立てられていたのです。その鑿跡はかろうじてそのポールのすぐ隣にありました。

私は携帯を取り出し、彼に電話してみました。運良くすぐに彼は出てくれました。鑿跡を見つけたこと、しかし、残念なことに車止めのポールが二本立っていて、ちょっと

間違えばあの鑿跡が消されてしまうところだったことを告げました。

ポールが立てられたことを彼は残念がるだろうと思っていた私は、そこで意外な言葉を耳にしたのです。

「ポールが立てられているのは別に構わないよ。あの鑿跡の位置が却って分かりやすくなったじゃないか。もし、ポールがまさにあの鑿の位置に立てられたとしたら、それも良かったと思う。あの啓示の体験は僕の中に確実に残っているからね。もともと、あの啓示を得られたのは、人々の手によって少しずつ変化し迷路のようになった市場の間があったからこそだし、そういう市場を僕は愛しているから。問題なのは…」

少し息を継いでから、彼は続けました。

「そういった、そこに暮らしている人の手による刻々とした変化じゃなくて、一気に暴力的に変化する問題なんだ。例えば、どの町でも起こっているけれど、都市再開発事業のような… あれは、酷いよ。一気に歴史や記憶なんか吹き飛んで、画一的などこにでもある町になってしまう。少しずつ変化しているのが、むしろ健康なんだ。」

私は、結局一週間の滞在の間、毎日市場に行き、ずっと彼の削り跡を眺めていました。開南側の大作は（大作なんて言ったら彼は嫌な顔をするでしょうけれど）圧倒的な感動を毎日与えてくれました。それも、ごく普通に。本当に不思議なのですけれど、こんな

にすばらしい物なのに全く自然に存在していて気がつかないくらいなのです。勿論市場の人々は、この削り跡が、ある一人の人物によって作られたものだとこのことを知ってはいません。糸満から不細工な野菜を売りに来ていた手先の器用な人が鑿を振ったなんてことももうすっかり忘れ去られています。鑿跡は時間の経過で少し丸みを帯び、大きくくなって、荷物を運ぶ一輪車の車輪を捕らえコトンコトンと揺らします。しかし、そのことに不機嫌な表情を浮かべる人は一人もいません。殆ど何の役にも立っていないこの広範囲な削り跡が全く自然に、圧倒的に美しく存在していることに満足しながら、私は帰路の飛行機に乗ったのです。

東京に戻ってから電話を試してみましたが、彼は出ませんでした。一週間ほど経ってからもう一度電話すると、すでにこの電話番号は使われていないというメッセージが聞かえてきました。以来、彼には一度も会っていません。それでも、去年、仕事で熊本に行ったとき、市内の市場で削り跡を目にしました。それが彼の仕事だという確証はありませんが、私はなぜか確信を持ちました。彼のあの少し恥じらったようないたずらっぽい笑顔が浮かんできました。

今回、プロジェクトがあると聞き、すぐに私は沖縄に行くために仕事をやりくりし、三日後にはもう那覇にいました。ワナキオの事務所という空き店舗に行き、参加したい

旨を伝えようと思いました。事務所には、ものすごく長身の痩せた外国人が黄色い箱を並べていました。あまりに集中して仕事をしていたので、ちょっと躊躇しましたが、声をかけると、にっこり笑ってこちらに行ったらよいと答えてくれました。

指差された場所が使われていない倉庫のような場所で、クリーム色のペンキが塗られた回転扉のようなものが付けられていました。そこにいるルリコさんという学生に参加を申し出ました。私のような見ず知らずの者が突然参加したいと言ったら、驚かれるのではないかと思っていたのですが、何でも無いことのように淡々と痕跡の採り方を教えてくれました。

その場所は樹脂の匂いが充満していて、私は説明を聞いている間に頭が痛くなってきました。ルリコさんは丁寧に教えてくれたのですが、少しゆっくり過ぎるくらいの話し方で、彼女はもしかしたら樹脂の匂いで少々朦朧としていたのかも知れません。目だけがきよろきよろ動いていました。

渡された型取りのための油粘土を持ってガープ川の橋に向かいました。後ろからルリコさんが走ってきて、刷毛を渡してくれました。これで埃や砂をとってからの方が綺麗に出来すから、と。

あの最初の一撃の鑿跡は変わらずそこにありました。以前ボールに巻き付けてあった

黒いラバーシートはちぎれ、一本の方は完全に無くなっていました。だらしなく広がったラバーシートの断片をよけながら、私は教えられたように油粘土を鑿跡に押し付け、ゆっくりと剥がしました。ラバーシートにひっかけられた猫のおしっこの匂いが鼻をつきました。

こうして型をとって、裏返しになった表面を見てみると、何かKという人に出会ったということも、一瞬、幻のように感じられました。彼とはもう二年以上も会っていません。でも、あのいたずらっぽい笑顔だけは鮮明に憶えています。



経済渾市場
公衆トイレ、男性用小便器 上方
壁面

那覇市農連市場痕跡プロジェクト
参加者：高木正樹（東京在住五十一歳）レポート2

鑿跡の記憶を伝えるために痕跡プロジェクトに参加した私は、ここに来て初めて、このプロジェクトが、必ずしも本当に起こった事ではなく、痕跡から何かの話を想像するのでも良かったのだと知りました。

鑿跡を油粘土で採り終えた後、樹脂におこして貰うのをルリコさんをお願いしながら、そのことを教えて貰いました。どちらかというところ、話を捏造する方が主だったようで、ちょっと私はこのプロジェクトを誤解して参加してしまったのかもしれない。

雑然とした倉庫の片隅にはワークショップのチラシが二つ折りにして置いてありました。ルリコさんと話をしながら何気なくそのチラシを見ると、そこには同じような痕跡の採集行為として、フロッタージュの手法が示してありました。子どもワークショップらしい可愛い表現でそこには「こすこす調査隊」と書いてありました。

樹脂の匂いはどうしても我慢できません。ほんの数分で頭が痛くなってきました。少し気分が悪くなった私は、市場の公衆トイレに行きました。そこで偶然、面白い落書きを見つけました。

それは、男性用の小便器の上、壁にコインか何かで引っ掻いて書かれた「20万円」の文字でした。トイレにある落書きといえは普通、性的なものが多いと思うのです。あるいは、数字でも何か計算した跡ならありそうですが、ただ「20万円」とあるのには参りました。何かとんでもない事情で書かれたような気がしてきます。

もう夕方になっていましたので、今日はホテルに帰ってから、これで捏造話でも空想してみようかなと、鉛筆と紙を貸してもらい、この痕跡をフロッタージュしておきました。

突然こちらに来てしまったので、今回は友人には会わないつもりでした。彼は高校の美術教師をしていて、奥さんも教員のため、家に電話をしても殆ど出ません。おまけに今時、携帯も持っていません。

ところが珍しく彼が電話に出て、奥さんは離島に出張で、自分は風邪気味だと言います。夕飯と一緒に食べる約束をしました。

彼は冗談半分で沖繩の教員採用試験を受けたところ受かってしまい、自分でもびっくりしながら美術教師になり二十数年になります。初めの十年ほどは結構意欲的に作品を作って個展なども時々やっていたようですが、最近はどうもこっそり小説を書いているようです。

実はこのワナキオ2002のことも彼から聞いたのですが、彼本人は参加するつもりもなく、農産市場で変なことをやっているよという程度だったのです。

私もここ数年市場のあたりをよく歩いているということは彼に話していませんし、ましてやK氏のことは誰にも話したことがありませんから、彼はなぜ私が今回来ているのかも知らないわけです。

「うりずん」に着くと、まだ彼は来ていませんでした。私は先刻のフロッタージュを眺めながら、泡盛をちびちびやっていました。これはやっぱり借金かな、どうしても必要な運転資金というところか。小便をしながら自分の一物を見て、手切れ金のことか。思わず考えたりしたとか。これはヤクザがからみそうだな... 妄想を続けているところに、やっと彼が来ました。

久し振りの再会は数日前に私が出席した高校の同窓会の話題で盛り上がりました。出席するのは嫌がるのに、あいつはどんなだったかと、かなりしつこく聞くのです。彼は同窓会など絶対にお断りらしく、ワナキオへの参加準備を出席できない言い訳にするのだとこっそり私には話していたのです。

電話で聞いたワナキオが面白そうだと思っただと来たんだと言うと、彼は物好きになやつだなどという表情を浮かべました。私は彼にはK氏のことは黙っておいて、彼が教えてくれ

たのと違って、痕跡を採集するプロジェクトは話を捏造する企画だったよと言い、先程のフロタージュを見せました。面白いだろう。農連のトイレで見つけたんだ。これで何かとんでもない話を作れそうだろう。そう言って彼の顔を見ると、何かばつの悪そうな表情をしています。悪いけど、たぶんそれは俺の落書きだと思うよ。そう言って彼は話し始めました。

絵を描かなくなってから、町歩きが趣味になってね、農連市場にもよく行くんだ。八年前から夜中とか土曜日の午後なんかね。ウチのがおしゃべりだからもう知っているだろうけど、小説のまねごとみたいなのも書いているし。

それで、農連に通い出してからすぐに、あそのトイレに駆け込んだら、凄いのがあったんだ。もろデュシャンだぜ。三台も。あの「泉」そっくりの小便器が三台あのトイレに並んでいたんだ。びっくりしたね。古いトイレだったけど結構みんな綺麗に使ってますって感じで。よかったんだよ。全体の感じも。それで俺は、勝手に自分で「デュシャンのトイレ」って名付けて、結構出かけるたびに寄ったりしていたわけだ。

それが、四年ほど前かな、学校の行事かなんかで、三カ月くらい町歩きが出来なくて、久し振りに行ったら、建て変わっちゃっていたんだ。まさか、と思って飛び込んだ

ら、あったのはあの四角い巨大便器だよ。がっかりしたね。内装もベコベコの合板だし。腹が立ったら、なぜか、もよおしても来たんで、えいコノヤロ汚してやれって気分でおしっこをしていると、隣の便器に近くの売店のおじさんが並んでおしっこを始めてね、にいさん、このトイレも上等になっただろうとうれしそうに言うんだ。この便器だって立派だ、確か一台二十万円だってよって。何が立派だ。あんまり腹が立ってんで、ポケットにあった車のキーで思わず、おじさんの見ている前で「20万円」って書いてちゃたんだな。悪いことをしたよ。だけどなんであんな似合わない巨大便器が好きなんだろうね、全く。

そう言い放つと、彼は残っていた泡盛をぐいっと空けて、もう帰るわ、と言って席を立ちました。何か自分自身に怒りがこみ上げてきたようです。

店の前で彼はタクシーに乗り、私は酔いをさましながらホテルまで歩くことにしました。ホテルで捏造話をあれこれ空想するつもりだったのですが、彼の話より面白いものを考える自信はありません。